http://decfamily.p1.bindsite.jp/2017/

We 25R

No.339　18/02/01

３つの「E」、データ共有システム

「ＡＳＵＫＡ（あすか）モデル」と名づけた。寿子さんや桐淵さんは全国各地で講演し、ＡＳＵＫＡモデルの普及に努める。「空にいる明日香ちゃんから次はあっちで話して、次はこっちで、と言われている気がしています」と、桐淵さんは話す。

山口県長門市の高校３年生、的場浩一郎さん（18）は中学生だった14年、学年全員が参加する救命講習でＡＳＵＫＡモデルを学んだ。講師は、桐淵さんの講演を聞いた地元の救急救命士だった。的場さんは「救えたかも知れない同年代の死があることに驚き、悔しいと思った」という。

翌年、的場さんは同県萩市の駅伝大会に出場した。担当区間を走り終えると、60代ぐらいの男性が近くで倒れていた。通報などは任せ、近くのスポーツ施設に駆け込んでＡＥＤを運び出し、救命措置をしていた医師に渡した。男性は一命をとりとめた。走る前から「あそこならＡＥＤがありそうだ」と目を付けていたという。

人の命を救う仕事がしたいと思うようになり、救急救命士の資格を目指して勉強してきた。この春から関東の消防局で働き始める。

埼玉県内の中学校で勤務する養護教諭もＡＳＵＫＡモデルを学んだ一人だ。

16年秋、剣道の授業前の準備運動でランニングをしていた男子生徒が突然倒れた。養護教諭がかけつけると、生徒はあえぐような呼吸をしていた。すぐに「死戦期呼吸だ」と思った。

救急車を呼びつつ心臓マッサージをし、ＡＥＤを使った。到着した救急隊の措置もあって生徒は意識を取り戻した。「ＡＳＵＫＡモデルを学ぶ前なら対応できなかった。明日香ちゃんと、広めてくれたご家族や桐淵さんのおかげです」と、養護教諭は話す。

「明日香は助からなかったけど、明日香の命がだれかを助けているようでうれしい」。寿子さんはピンク色の形見の腕時計をつけ、これからもＡＳＵＫＡモデルの普及活動を続けていく。

2016年の人口動態統計によると、１～19歳の死因の１位は「不慮の事故死」だ。525人の子どもたちが交通事故や転落、火災などで亡くなっている。

子どもの事故が起きると、保護者や学校などの監督責任が問われがちだ。一方で、起きた事故をどう予防策につなげていくか、という視点はおろそかにされてきた。

産業技術総合研究所（東京）によると、予防には「法制化による規制（Enforcement）」、事故が起きにくい製品開発などの「環境改善（Environment）」、意識や行動の変化を促す「教育（Education）」の「三つのＥ」の視点が大切だという。「ＡＳＵＫＡモデル」は、教育の視点から考えた予防策といえる。世界保健機関（ＷＨＯ）もこうした科学的な対策を各国に求めている。

予期せぬ死を減らすには、幸いにも死に至らなかったケースの分析も欠かせない。だが、子どもの事故の全体像が詳しく分かる統計は日本にない。どんな環境で事故が起きたのか、年齢や身長、季節などでリスクはどう変わるのか。個人情報を除いたデータを医療機関や行政機関、専門家らが共有するシステム作りが求められている。